

<基本情報>

所在地：福岡県嘉穂郡桂川町

<農場概要>

- 12.5ha (有機JAS認証未取得)
- 労働力7名 (古野氏の家族6名、従業員1名)
- 有機農業により水稲、各種野菜及び畜産を営む



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 学生時代に有吉佐和子著「複合汚染」を読み影響を受け、雑草防除と地力維持に関心を持ち、農薬不使用の有機農業を実践した。有機農業は環境に優しく、健康によい。家族が食べるために作ることが最大の目的であり、同じものを消費者に届けている。

<販売について>

- 基本的に近隣の消費者へ年間契約の直接販売が多いが、そのほかにインターネット販売等も行っている。
- 農業は成長するとともに、維持することが大事であることから、変化に応じて様々なことに対応しながら、地元の人々に直接販売することを続けていきたい。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫、除草対策

水稲については、1988年から開始した「合鴨農法」の体系化を実施することにより、害虫の駆除と除草を行っている。野菜栽培については、水田輪作による防虫、耐病性の強い品種の作付け、高畝栽培、排水対策を実施することにより病虫害対策を行っている。また、独自に開発した除草農機具（ホウキング）を使用し除草することで、除草時間の大幅な削減を実現している。

● 土づくり

自家製の堆肥（籾殻、鶏ふん、牛ふんを堆肥舎でかくはん・発酵）を使用することで土づくりを行っている（野菜畑については、10a当たり5tを投入）。このことにより、**慣行栽培と同程度の収量を確保**している。

<苦労しているところ>

- 地球温暖化により、害虫や雑草が増加してしまい、野菜づくりに影響がでていること。

<今後の対応>

- 地域の農業を引継ぐ者が少なく、農地の管理委託が増え、今後、自分の経営面積は増えると予想されるが、できる限り家族で有機農業及び地域農業を維持していきたい。

<現場の課題>

- 地域の担い手確保と地域社会の維持。



【お問合せ先】TEL.0948-65-2018

ホームページ<http://aigamokazoku.com/index.html>

<基本情報>

所在地：福岡県田川郡赤村

<農場概要>

- 面積：2.6 ha (全て有機JAS認証)
- 従業員：25人 (役員を含む)
- 水稻及びトマト、ミニトマト、セルリー等 (ハウス栽培)
- 生産したトマトを原料に加工品を製造・販売。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 人間・環境に優しい農業の創造とこのような農業を広く社会にアピールし、農業の社会的役割や農業者の社会的地位の向上に貢献すること、地域の生産の核となり地域再生・地域雇用を生み出し地域のモデルとなることを目的として有機栽培を開始。

<販売について>

- 販売する全商品が有機JAS認証品。生産したトマトを使用し加工品(ケチャップ等)の製造・販売も行っている。
- 有機JASの小分業者認証を受け、販売先からの要望に沿った形態で自社包装対応を行い、好評を得ている。
- 販売先はグリーンコープを中心に、イオングループ等約20社と直接取引(販売先への品数・ロットについては、連携を組む生産法人からの仕入れにより確保している)。
- 有機セルリーは、大手スーパーから直接取引のオファーが入るまでになっている。
- 経営管理ソフトを導入し、生産コスト等を管理することで、販売先との価格交渉を実施している。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
病害虫の対策としては、有機農産物にも使用可能なBT剤、土壌改良剤、天敵を使用。トマト等の受粉にはクロマルハナバチを活用。
- **雑草対策**
施設内ではマルチシート、除草は機械と手作業。
- **土づくり**
牛糞2：草8をベースに有機物や乳酸菌等を混合した堆肥を使用して土作り。5年程度で病気の減少と慣行栽培と同程度の収量達成。

<苦労しているところ>

- 資材費、運送経費等の抑制。

<現場の課題>

- 資材・燃料費、人件費、物流経費などの高騰への対応。
- 地域の耕作放棄地増加等の荒廃農地対策。

<今後の対応>

- 生産技術体系を確立し、安定的な生産を確立するとともに、次世代へ引き継げる経営の確立。
- 生産規模を拡大し、収益の向上を目指す。

【お問合せ先】TEL.0947-62-3349

会社ホームページ<https://www.torigoe-network.com/>

<基本情報>

所在地：福岡県豊前市

<農場概要>

- 10ha（うち有機：6ha）
- 45名（正社員15名、パート30名）
- ベビーリーフ、ホウレンソウ（有機）
アスパラガス（減農薬、減化学肥料）ほか



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 食の安全・安心は重要であり、消費者の方により良い国産農産物を提供したいという思いとともに、当初から栽培水準を高く持つことにより、付加価値と収益性の両立を図ることを目的として開始。
- **令和2年（2020年）に有機JAS認証を取得。**

<経営について>

- 理念は、「未来に新しい種をまく」
- 経営ビジョンとして、最先端の農業経営を目指すことを会社設立時より目標としており、GLOBALG.A.P.も取得済みである。

<販売について>

- ベビーリーフは、(株)果実堂を通じてスーパー等へ販売している。
- アスパラガス、ホウレンソウは、大手百貨店や量販店へ販売している。

【お問合せ先】TEL.0979-33-7885
会社ホームページ <https://fyagri.jp/>

<病虫害対策・除草対策>

- **病虫害対策**
ハウスの外側には防虫シート、防虫ネットにより対策を施しているほか、病虫害が発生しそうな近隣の土地の草刈りを行うなどの事前の予防対策を行っている。
- **雑草対策**
水管理の徹底が重要であり、どのタイミングでどのくらいの水分量が雑草の生育を抑えられるのか、**土壌分析を行いデータ化し灌水マニュアル**を作成している。

<苦労しているところ>

- 畦畔などの雑草の管理 有機資材の選定。

<今後の対応>

- 豊前エリアを中心に、20haの圃場面積を確保し、300棟のハウス建設が目標。



<基本情報>

所在地：福岡県宗像市

<農場概要>

- 有機JAS認証ほ場90a（いちご「あまおう」）
- 従業員：12名（うち夫婦、通年雇用2名、期間雇用8名）



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 2010年に就農した当初は、いちごの慣行栽培に取り組んでいたが、土壌分析を行った際にリン酸値が高かったため、これを機に化学肥料を減らして栽培することを突き詰めた結果、9年前に有機栽培へ移行。
- **令和2年（2020年）に有機JAS認証を取得。**

<販売について>

- ネット販売を中心に、空港、駅、百貨店及び近所の道の駅で販売。
- 中国の貿易会社を運営していた経験を活かし、可能な限り中間事業者を省き、直接現地（アジア圏）の業者と取引を行うことで、通常、朝収穫したものが現地の百貨店に届くまで3日を要するところ、翌日には届くことが強み。
- 宗像市のふるさと納税返礼品として登録。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策

土着天敵（ギフアブラバチ等）、土着菌（放線菌等）により生態系バランスを保ち、害虫や病気が増えにくい状態を作る。



【病害虫を捕食します】

● 土づくり及び雑草対策

森林に囲まれた腐葉土による土着菌が自然と増える環境を活用し菌を増殖。毎年5月の収穫後にいちごの茎葉と雑草と一緒に緑肥としてすき込み、米ぬかを投入し、ぼかし肥料として使用。

<苦労している（した）ところ>

- 蛾（ヨトウムシ）の幼虫をピンセットで捕ること。
- 「あまおう」の有機栽培は、殆ど前例が無かったため誰にも教わる事が出来ず、試行錯誤し手探りで、有機栽培を確立した。

<今後の展開>

- 輸出はオーガニック先進国の米国や台湾にも拡大した。今後はこれらの国等の足場固めと、国内の販売も強化したい。



【受粉のお手伝いをします】

【お問合せ先】TEL. 090-9653-5300
ホームページ：<https://isefields.work/index/>

<基本情報>

所在地：福岡県久留米市

<農場概要>

- 面積：5.3 ha（全ほ場有機栽培）
- 従業員：正社員4名、パート3名、技能実習生・特定技能実習生15名
- 栽培品目：ラディッシュ、ほうれん草、小松菜



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 慣行栽培で規模拡大を進める中、農薬を使用しても効果が出ない、病気の増加、発芽がそろわない等、収量低下に直面。
- 土壌の有機物不足、団粒構造ができていない点、生物の多様性が少ない点に気づき、関係者からの助言や書物等から土づくりの大切さを学び、2017年から有機栽培を開始。

<販売について>

- JAを通じた市場出荷や小売店等との契約。
- 加工品の製造を始めた際に展示会に出展し、仲卸会社を紹介いただいたことでスムーズに販路拡大につながった。



<経営面の工夫等について>

- 約90棟あるハウスや各ほ場の栽培から出荷までの過程を管理するため、より自社の作業体系に合うようにアプリを活用して独自のシステムを開発。
- ハウスの土壌水分管理について誰でも対応できるようにする等、作業の標準化や共有化を図る工夫を行っている。
- 2021年に有機JAS認証を取得。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策・雑草対策

窒素成分が多くなると害虫が寄ってきやすくなるため、そのコントロールを重視。毎作、自社で簡易的な土壌分析を実施し、窒素成分の確認を行い、年2回程度、分析機関でより詳しい土壌分析を実施し、施肥設計。やむを得ない場合は、有機JAS認証の規格を遵守した形で微生物農薬等を活用。4～10月頃には毎作、資材投入後、ビニールを被覆し、太陽熱を利用した高温処理を実施。

● 土づくり

ハウスでは、各品目を組み合わせ、約7作/年栽培し、油かすや堆肥を施用。露地では鶏糞を中心に施用し、各品目に加え、夏はソルゴーやヘアリーベッチ等の緑肥も栽培し、土づくりに活かす。



<苦労しているところ>

- 水害、酷暑とそれによる害虫の増加。

<今後の展開>

- 地域の資源を利用した自家製の植物性堆肥の製造にも取り組みたい。将来的には加工品の有機JAS認証も取得予定。



<基本情報>

所在地：佐賀県みやき町

<農場概要>

- 施設栽培：施設42棟 約1.2ha 葉物野菜18品目(ほうれん草、小松菜等)
- 露地栽培：15a 葉物野菜4品目(夏場のみ)
- 従業員9名(臨時雇用を含む。)



<有機農業に取り組むきっかけ>

- サラリーマン時代に長時間労働等により体調不良となった際に、食の大切さを痛感。有機農業に取り組もうと決意し、奈良県宇陀市の有機農家に飛び込み栽培技術を習得。
- 平成22年(2010年)に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 販売する野菜全てが有機JAS認証品。
- 一つのハウスの中で多品目を混作・ローテーション ⇒ 周年で品数を確保 ⇒ 付加価値を高め定額販売 ⇒ 安定収入を確保。
- 1パックに5種類のオーガニック野菜を入れたオリジナル商品等を販売し販路拡大。
- 2019年にGFP(農林水産物・食品輸出プロジェクト)に登録し、香港への輸出に取り組んでいる。
- 今年から地産地消の促進や環境に配慮した農産物の販売を進めるコープさがとの取り引きが始まったことで、販売量の増加が見込まれる。
- 過去、Amazonの野菜セット部門でベストセラー商品ランキング第1位を獲得。



【一つのハウス内で多品目栽培】



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- 病害虫対策
有機JASで認められた農薬も使用しておらず、BLOF理論に基づく病害虫に強い野菜作りに取り組んでいる。
- 雑草対策
は種前に2週間程度シートを被せ、土壌を高温殺菌。ハウス外の雑草対策として、羊を飼養している。
- 土づくり
有機肥料は、おから、米ぬか、油粕、粃殻など植物由来の原料のみを使用した自家製。また、有機肥料及び廃菌床と剪定くずを粉碎したチップを原料とする植物性堆肥を混ぜた土づくりを行っている。



【植物性由来有機肥料】



【野菜の袋詰め作業】

<苦労しているところ>

- 販路拡大、適正価格の設定、高温対策、安定供給が課題。
- 環境に配慮した農産物の生産に取り組む生産者や平坦部における農地の確保。

<今後の展開>

- 新型コロナウイルス感染症等を契機に輸出量が減少する中、地産地消の促進や環境に配慮した農産物の販売促進を図る販売業者との取り引きの拡大に取り組み、さらに、学校給食での使用について、自治体や有機農業者等と連携し検討を進める。

【お問合せ先】 TEL.0942-89-1559

ホームページ <https://saganvege.com>

＜基本情報＞

所在地：佐賀県唐津市浜玉町

＜農場概要＞

- 有機JAS認証ほ場約2.4ha（自然薯、ごぼう、ゴーヤ、さといも）
- 従業員：3名（本人、通年雇用2名。繁忙期は別途3名程度期間雇用）



＜有機農業に取り組むきっかけ＞

- 生き方を見つめ直そうと海外を旅した際、インドネシアの島で高潮被害を目の当たりにした。現地の方から地球温暖化の影響によるものだと知らされたことから、実家の田畑で環境に優しい農業を始める覚悟を決め、2002年に減農薬農業に取り組んでいた祖父に弟子入り。就農から5年程度は、化学農薬・化学肥料の使用を抑えた栽培を行い、その後、化学農薬・化学肥料不使用栽培を開始。
- 平成24年（2012年）に有機JAS認証を取得。

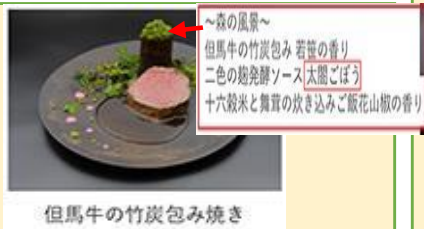
＜販売について＞

- 販売先はミシュラン掲載店を中心に東京、名古屋、大阪、京都、福岡等のホテルや飲食店、百貨店、高級スーパー（納品先のミシュランの星の数の合計は100を超えています！）
- 1割は、ネットでの直接販売。

＜首脳夕食会への食材提供＞

- 2019年G20大阪サミットの首脳夕食会の食材として、当園の「自然薯」、「太閤ごぼう※」が選ばれた。

※「唐津太閤ごぼう」で商標登録済
（佐賀県唐津市で生産されるごぼう）



＜土づくり＞

〔適地適菜〕 ささき農園の自然薯畑は天然の自然薯が自生している山を切り開き畑にしています。この山の豊かな自然を壊さないように土づくりには3年の月日をかけ草を育て、1年目、2年目と違う種類の草が育ちその土地が育てた、その土地が必要とする草をすき込むことで地力のバランスを整えていきます。

＜病害虫対策・除草対策＞

マルチを利用することでアブラムシやスリップス類などの害虫や病気の発生を抑制するとともに、雑草防除も行っている。作物の前作に辛子菜を栽培し、全量鋤き込み、土壌炭素率を上げ微生物の活動を促すとともに、辛子菜の辛味成分による殺菌作用を利用し土壌病害や線虫を抑制。

＜苦労したところ＞

就農時から主力商品として考えていた自然薯の有機栽培を始めてから7年近くは、保存中や定植後の腐敗が発生した。それを克服し栽培方法を確立することに苦労した。

＜今後の展開＞

2026年2月に法人化を予定しており、新たに加工品にも取り組む計画である。多くの人に食べていただいて、健康になっていただけると幸いです。



【お問合せ先】 TEL. 090-5293-2502
ホームページ：sasakinouen831.com/

有機農業の取組 No.13 農業生産法人 吾妻旬菜株式会社 令和7年10月現在

<基本情報>

所在地：長崎県雲仙市

<農場概要>

- 全て有機 J A S 認証ほ場 9 h a (露地野菜)
- 地元の運送会社と連携し、冷蔵トラックで輸送。高い鮮度を維持して有利販売。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 40年ほど前に3名で農薬不使用の栽培を始め、徐々に仲間が増えていき、有機農業研究会を発足。その後、更なる飛躍を目指すために、平成19年に「吾妻旬菜株式会社」として法人化。
- 平成13年(2001年)に有機 J A S 認証を取得。

<販売について>

- 販売先は法人化前から取引がある関西方面及び九州方面。
- 地元の運送会社の冷蔵トラックで搬送することで、翌日には消費地に到着し、高い鮮度を維持した状態で有利に販売することが可能。
- 根菜類をある程度のロットにまとめて送ることで、運送経費を削減。

<収量・品質について>

- 手間をかけても慣行栽培に比べ7~8割程度。
- 作物の生育に最も適した旬の時期に栽培して、品質の向上を図っている。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
周辺の雑草管理、高畝による排水対策、株間を広くし風通しを良くする、などにより病害虫の発生を抑制。
- **雑草対策**
バーナーによる除草、管理機による除草、黒マルチによる雑草対策を実施。
- **土づくり**
地元ブロイラー飼養農家から出る鶏糞に米ぬかを混ぜた堆肥の投入。豆科植物やソルゴーなどの緑肥の導入。

<苦労しているところ>

- 労働力の不足。
- 近隣ほ場でのドローン防除等からのドリフト対策。

<現場の課題>

- 輸送費が高騰することへの対応。

<今後の対応>

- 地元での販売先の確保、消費者との交流。
- 地元住民への有機農業の理解促進。



【お問合せ先】 TEL.0957-38-6710

<基本情報>

所在地：長崎県南島原市

<農場概要>

- 有機JAS認証ほ場 約7ha（露地野菜）
- 露地野菜・米・柑橘等。自社農場及び正会員38名・協力会員6名による有機農業・特別栽培での生産、産地直送販売。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 消費者の安全・安心な食生活の実現、生産者自身の健康、自然を大切にし、農薬及び化学肥料の使用を極力減らすことを目的とした研究会を設立。その後、直販による販売活動を開始し、平成3年（1991年）に(株)長有研を設立。
- **平成13年（2001年）に有機JAS認証及びAFASシステム認証取得。**

<販売について>

- 関東を中心に生協、有機農産物専門流通業者、自然食品店、消費者グループ等へ出荷。多様な出荷先の確保により経営面でのリスクを分散。
- 全取扱量の約9割が取引先との契約栽培で、その年の気象や生産コストと収量の実情を常に情報交換を行い、相場の影響を受けにくい。

<収量・品質について>

- 化成肥料が投入出来ないため、全体的な収量は慣行栽培の7割程度。
- 会員間での栽培技術の統一、販売先のニーズに合った多様な品目、数量の確保が可能。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
たまねぎの苗床は、事前に太陽熱を利用した土壤消毒を実施。
- **雑草対策**
ほ場周辺の除草はチップソーがメインであるが、イノシシ対策用のワイヤーメッシュ周辺は手作業。
- **土づくり**
若手が中心となって作成した独自の設計書によるぼかし肥料（外注）を施用し、土壌分析・診断と組み合わせた適正施肥を実施。

<苦勞しているところ>

- 労働力の不足。
トラックドライバー不足による輸送費、資材等の経費の高騰。

<現場の課題>

- 除草対策が一番の課題。人手不足・高齢化で規模拡大も難しい。

<今後の対応>

- みどりの食料システム戦略の策定や南島原市オーガニックビレッジ宣言にともない、有機農業に対する消費者の理解を生産者と共に高め、安定供給可能な栽培を実践する。



【お問合せ先】TEL. 0957-86-5041

会社ホームページ <https://www.choyuken.com>

<基本情報>

所在地：長崎県南島原市

<農場概要>

- 経営面積：約40ha（うち有機JAS認証ほ場 約70a（たまねぎ））
- 露地野菜・米等の会員32名による有機農業・特別栽培での生産、産地直送販売。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 前身の任意組合を設立した昭和50年代から化学肥料、化学合成農薬に頼らない農業を実践。平成5年（1993年）農事組合法人供給センター長崎を設立。
- 平成22年（2010年）に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 九州・近畿・関東方面中心に生協への出荷が約7割を占める。
- 会員間での栽培技術を統一し、販売先のニーズに合った多様な品目の導入、数量の確保が可能。
- 契約栽培により再生産可能な価格設定、通いコンテナの利用等によるコスト削減も行っている。

<収量・品質について>

- 有機栽培における長年の技術・経験を活かしながら、適性な品種選定を行い収量を向上。
- 使用する肥料を組織内で統一し、安定した品質を確保。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
たまねぎの苗床は、事前に太陽熱を利用した土壌消毒を実施。
- **雑草対策**
手作業による除草。
- **土づくり**
地域で発生する家畜糞尿等の資源を活用し、農家が堆肥を生産。春作収穫後、刈藁・刈草などの緑肥による土づくり。

<苦労しているところ>

- 会員（農家）はもちろん、集荷場での労働力の確保。輸送費が高騰しているが、消費者の有機農業への理解も薄れ、価格への転嫁が難しい。

<現場の課題>

- 農薬のドリフト防止のための緩衝帯設置、除草作業、周辺農家への有機農業に対する理解促進。輸送費高騰への対応、統一資材の一括購入によるコスト低減。

<今後の対応>

- 生き物調査、生物多様性を発揮した有機農業の啓発活動の実施。販売先の開拓、高品質と輸送効率のためのロットの確保。



【お問合せ先】TEL. 0957-87-2926

会社ホームページ <http://www.jaganosato.jp/>

<基本情報>

所在地：長崎県南島原市

<農場概要>

- 経営面積：約200ha
- 有機農業をはじめ、栽培期間中農薬不使用栽培、特別栽培レベルなど、消費者に信頼される、環境にも優しい栽培方法によってできた農産物を組合員133名で生産し、産地直送販売。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 昭和50年（1975年）5名の青年農業者が産直を目指して発足。その後、長年に渡って続けられてきた近代農業をもう一度見直し、消費者に安全・安心な食べ物を供給するために、昭和62年（1987年）から県内の企業と協力して肥料の有機質成分割合を高めてきた。
- 平成18年（2006年）に「有機農業推進法」が施行されたこともあり、同年、有機JASの認証を取得。

<販売について>

- 全国の消費者グループや大手生協との取引が約7割を占める。契約栽培のため、価格変動が抑えられ、安定的な収益に繋がっている。
- 長崎県諫早市及び長崎市に直売所、福岡・鹿児島・長崎の生協35店舗にインショップを常設。

<収量や品質について>

- 収量は天候に左右されることが多い。
- 日々の作業記帳や作物ごとの栽培管理計画に基づく、徹底した品質管理を実践。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
品種の選定や作期の分散(有機以外では露地から施設へシフト)
- **雑草対策**
人手・草刈り機による除草。
- **土づくり**
土壌分析による適正施肥。天然物質に由来する成分を用いた肥料、自家製堆肥の施用、緑肥作物の導入による土づくり。

<苦労しているところ>

- 労働力の不足。
- 近年、気象変動が激しく毎年異なるため、その対応が難しい。

<現場の課題>

- 送料が高騰している。(価格へ転嫁できない)

<今後の対応>

- 新規就農者の確保とともに、青年農業者への有機農業の推進。



【お問合せ先】TEL.0957-84-3393

会社ホームページ <https://www.tentoumusi.net/>

<基本情報>

所在地：長崎県五島市三井楽町

(令和2年度未来につながる持続可能な農業推進コンクール生産局長賞受賞)

<農場概要>

- 有機JAS認証ほ場48ha (かんしょ、大麦、小麦)
- 有機JAS認証のかんしょを加工し、赤ちゃん用のおしゃぶり干し芋を製造



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 大阪市でコンサルティング会社に勤務し、将来、農業コンサルティングに従事したいと考えていたところ、義理の祖父の出身地である当地で農地を取得したことにより10年前に営農開始。当初は、農薬や化学肥料を低減した栽培に取り組んでいたが、土づくりや生物多様性保全の取組、他産地との差別化、加工品の付加価値向上などを考え、平成30年(2018年)に有機JAS認証取得を開始し、令和2年(2020年)には、全ほ場の有機JAS認証を取得。

<販売について>

- かんしょ(青果用及び加工用)は、全国の小売店、飲食店、生協、通販会社、大手コンビニ等へ販売。大麦、小麦は、卸業者に販売。
- 高付加価値化として、かんしょを、赤ちゃん用のおしゃぶり干し芋「おしゃぶー」や「ひとくち焼き安納芋」、和洋菓子用原料として「かんしょペースト・パウダー」に加工し、自社で製造・販売。同パウダーを活用し新たな商品として腸活サプリメント「.hel(ドットヘル)」を開発し販売。



<輸出について>

- 商社と協業し、国内で取引需要が少ないかんしょの規格品(S~2S)を、オーガニック需要が高い香港を中心に輸出。

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
自社製造の天然由来の液肥や環境にやさしいBT剤を散布することで、病害虫被害を抑えている。
- **雑草対策**
かんしょと麦の輪作を実施。春まで麦を栽培することにより夏季の雑草抑制に繋がり、機械除草の回数を抑えている。黒マルチシートを、栽培畝に加え通路部(畝間)にも敷設することで除草作業の負担を軽減している。
- **土づくり**
3年に1度の頻度で土壌診断を行い、必要なミネラル等を施用。肥料(液肥)は、有機JAS適合資材(納豆菌、菌糸剤)を中心に、自社の堆肥工場で製造した肥料を使用。



<苦労しているところ>

- 人口減少により、耕作放棄地が増加。これまで10haに及ぶ耕作放棄地を再生したが、再生作業以上に苦労したことは、農地の地力向上に時間を要すること。



<今後の展開>

- 五島市三井楽町は、20年間で3割以上人口が減少。耕作放棄地の解消、移住者・市民が働きたい会社づくり等により地域に貢献し、「オーガニックをプラットフォームとした街づくり」を将来のビジョンとしている。2026年には、農業と観光を融合させた地域活性化の取り組みの一環としてリゾートホテル(レストラン併設)の開業を予定している。

【お問合せ先】TEL. 0959-84-2989

ホームページ：<http://osyaburi.jp/index.php>

<基本情報>

所在地：熊本県上益城郡山都町

<農場概要>

- 生産農家4軒で会社を運営（正社員2名、パート3名、特定技能外国人6名）
- 経営面積：4ha（全て有機JAS認証取得）
ベビーリーフ（ルッコラ、水菜、ターサイ、ビート、レタス類）



<有機農業に取組むきっかけ>

- 高冷地で減農薬栽培が盛んな地域であったが、取引先からの勧めで有機農業に転換した。
- 平成19年（2007年）に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 通年出荷を基本とし、栽培計画を立て、季節に合わせて品種を選定し、幼葉ならではのおいしさを提供。
- 契約栽培でインターネット等を活用しながら販路の確保に努めている。
- 熊本県内を基本に、九州～関東まで幅広いネットワークを活かし、卸売事業者やレストラン、スーパーへ出荷。



<病虫害対策・除草対策・土づくり>

● 病虫害対策

太陽熱利用による土壌消毒を実施。（湛水後、農業用ビニールで被覆し、ハウス内を密閉）

● 土づくり

土着菌（放線菌）に着目した堆肥を使用。メンバーの中には、山野草を利用し、1～2年発酵させたものを使用している。

<苦労しているところ>

- 過去にはコンテナ出荷を行っていたが、現在は販売先に応じた小分けパッキングを行うため、出荷経費・輸送コストが増加している。販路の確保も課題。

<今後の対応>

- 2022年より人材不足を補うため、特定技能を活用し外国人雇用を開始した。雇用人数が増加していることから、日々のコミュニケーションや生活面のフォローを強化し、人材の定着を図る。



【お問合せ先】TEL.0967-72-9494

メール：seiwaminerarukai@outlook.jp

<基本情報>

所在地：熊本県上益城郡山都町

<農場概要>

- 経営面積：3.7ha（全て有機JAS認証取）
（ピーマン、里芋、玉ねぎ、にんじん、コカブ）



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 東日本大震災のボランティア（炊きだし）で食べ物が手に入らない状況を経験し、自ら農産物を作りたいと思ったことがきっかけ。東京から有機農業が盛んな山都町へ移住。
- 平成26年（2014年）に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 生協との契約栽培が中心。関東、関西方面に出荷。
- 新規就農者同士の販路確保のため「ASO GAIRINZAN ORGANIC合同会社」を設立。（メンバー10名でリレー出荷することにより取引先との契約量を確保）
- メンバーで規格、品質等を統一するため、定期的に学習会を開催。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 雑草対策

人参は太陽熱養生処理（植付け前のマルチ被覆）により雑草を抑制。

● 土づくり

科学的分析により土壌状態を把握。状態にあわせた資材（馬糞、竹の粉、雑草等）の投入を行いながら土づくりを実践。

<苦労しているところ>

- 今では、経営が確立しているので、苦労はしていないが、新規就農当時は機械、設備への投資に苦労した。

<今後の対応>

- 個人経営の規模を拡大するよりは、規模の小さな家族経営が参画し、共同で営農を行いながら、出荷グループを発展させていきたい。



【お問合せ先】TEL.090-3547-1589

メール yaski525@gmail.com

<基本情報>

所在地：熊本県宇城市

(平成28年度環境保全型農業推進コンクール 農林水産大臣賞受賞)

<農場概要>

- 経営面積：約5haで、水稻、野菜類（約20品目）を栽培（米、生姜、里芋、セロリー、その他露地野菜）



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 昭和45年就農。当初は慣行栽培をしていたが、農薬の使用による身体面への負担を感じたこと。また、農薬の多投入や農産物の外観品質への評価に疑問を持ち始め、有機農業実践者に出会い昭和50年代始めから有機農業に取り組む。
- 平成13年（2001年）に有機JAS認証を取得。

<理念>

- いのち・暮らし・環境を守る有機農業を推進し、子や孫、次世代につなぐ。

<販売について>

- 有機農産物と一目でわかるように、販売するすべての農産物に有機JAS、グリーン農業表示マーク（熊本県のグリーン農業制度）、自社ロゴマークを1枚のシールにして貼付し販売。
- JA系の直売所、くまもと有機の会（生産者主体の産直を行う組織）及び九州内の生協に出荷。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策

作物の輪作で病害虫の発生を極力少なくする体系づくり。
太陽熱養生処理で土壌の病害虫殺菌処理。

● 雑草対策

い草、稲ワラ、黒ポリフィルムによるマルチングや、太陽熱養生処理で除草の労力を軽減。

● 土づくり

緑肥（ソルゴー）をすき込むことにより、土壌環境を改善。
肥料は、有機JASに対応したボカシを使用。

<現場の課題>

- シカによる食害の増加。設置している侵入防止柵が低いいため、より高い柵への変更が必要。

<今後の対応>

- 更なる有機農業の普及を図り有機農産物の安全供給と面的広がりを目指すため、ネットワーク化、新規就農者の育成に取り組む。
- 地域の特産物である「生姜」加工品の生産・販売を拡大する。



【お問合せ先】 TEL.0964-43-0234

メール yuk_morita@kuc.biglobe.ne.jp

<基本情報>

所在地：熊本県上益城郡御船町

<農場概要> 75ha(水稲、にんじん、ばれいしょ、など約100品目)

うち有機 J A S 認証30ha(水稲、にんじん、ばれいしょなど)、構成員50名

<理念>

自然と共に生きる丁寧な暮らしを ひとり一人が実践し、「有機農業生産者、加工者、流通事業者消費者が共に支え合い、自分自身、家族、友人、知人に食べて欲しいものを作り販売すること」をテーマにし、熊本の「有機の基地」をめざして日々の活動に取り組んでまいります。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 昭和51年に有機農業生産者と消費者を結ぶ専門機関「株式会社熊本有機農産流通センター」を設立。その後、有機農業を広く伝える目的で昭和60年に本会が発足。

<有機 J A S 認証に取り組むきっかけ>

- 顔の見えない消費者へのアピールには第三者が認定した有機 J A S 認証が不可欠のため取得。

<主な販売先>

- 消費者への直接販売（季節の野菜セット）
- 生協



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- 圃場ごとに土壌分析及び生産物の栄養成分分析を実施し圃場にあった土づくりにより、健全な作物の栽培（セルロースの強化）ができ、病害虫耐性も強くなる。また、「太陽熱養生処理」により土壌物理性の改善（土壌の団粒化・水はけ改善）、秀品率の向上、生物性の改善による病原菌抑制及び雑草の種を熱等で死滅させることで除草作業を殆どしなくてよくなる。
- 人参の慣行栽培では単収3.5トン、圃場にあった土づくりを実施した場合、単収6トン程の収穫でき、栄養成分では糖度が向上し、硝酸（エグミ）が減少しおいしい農産物が出来る。

<苦労しているところ>

- 異常気象による影響。
- イノシシ・シカ等による鳥獣被害。

<今後の対応>

- 10年後を見据えて生産量確保にむけ、新規就農者・転換者に対して研修会の開催。

【お問合せ先】 TEL.096-281-7355

HP <https://kumamotoyukinokai.jimdo.com/>

直売所：オーガニックはあと（熊本市東区湖東2-1-3）

<基本情報>

所在地：熊本県宇城市不知火町

(令和2年度未来につながる持続可能な農業推進コンクール生産局長賞受賞)

<農場概要>

- 延べ面積：約36ha (宇城市、氷川町、産山村、水俣市等)

主な栽培品目：有機JAS認証トマト、かぼちゃ、たまねぎ等の野菜類、柑橘類
(柑橘類の一部のみ特別栽培)



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 「農業は自然を守る産業である」という信念のもと、有機栽培で自立できる農業を目指し、市内で有機農業に取り組んでいた澤村氏を中心に、2001年に柑橘農家4戸、野菜農家2戸の計6戸で設立。2003年に法人化。(2025年11月現在、11戸で構成)

<販売について>

- 販売先は、大半が生協及び量販店。また、少量ながら県内の直売所や自社オンラインショップでも販売。
- なお、販売先との商談にあたっては生産物の栄養分析結果(糖度、ビタミンC、硝酸イオン、抗酸化力)を活用し、十分な品質が確保されていることを説明。



<消費者への情報発信について>

- 年に1回、消費者等との交流を目的にほ場見学、農業体験ツアーを開催。生協と協力し、生産物に対するアンケートを実施し、消費者ニーズを把握。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策

腐敗するような資材は投入せず、虫害発生が少ない時期に栽培。ハウス内は加湿状態としない等の環境負荷をかけない栽培を行うことで病害虫を抑制。また、タケノコや山菜等から抽出した天然エキスを使用。

● 雑草対策

通路や畝の上にカヤやわらを敷くことにより、雑草発生を抑制。

● 土づくり

土壌バランスを重視し、野草堆肥及びボカシ肥料を施用。野草堆肥は、2年程熟成。また、ボカシ肥料は米ぬかを中心に魚粉やカキ殻等加え、自社肥料製造施設で製造。土壌分析に加え、野草堆肥とボカシ肥料の成分分析も毎年実施することで、土の状態を常に把握するよう努めている。

<苦労したところ>

- 有機栽培を始めた頃は、販路拡大のため積極的に売り込んだがうまくいかなかった。その後の品質向上により自然と販路が拡大した。

<今後の課題>

- 有機農業の担い手育成。培った技術や農地の次世代への継承。



【お問合せ先】TEL. 0964-33-7240

ホームページ：<http://higoayuminokai.co.jp/>

<基本情報>

所在地：熊本県上益城郡山都町

(令和3年度九州地域未来につながる持続可能な農業推進コンクール九州農政局長賞受賞)

<農場概要>

- 面積：3.70ha(うち有機3.70ha)
- 従業員：家族2人と従業員2人、農繁期アルバイト1～2名
- 栽培品目：にんじん、ばれいしょ、たまねぎ、キクイモ等



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 有機農業を営む義父母から離農の相談を受けたことを機に、平成19年に就農を決意。翌年、県立農大等で農業の基礎を学び、平成21年に有機農業2.1haを経営承継し、**同年(2009年)に有機JAS認証を取得。**

<販売について>

- 平成23年に、共同出荷によるコスト削減や安定的な出荷及び新たな販路確保を目指し、「山都町有機農産物出荷協議会」を代表として設立。平成25年には同協議会と他社との事業統合を経て、平成28年に山都町最大の有機農産物出荷プラットフォーム「(株)肥後やまと」(有機農業者48名で構成)の法人化に携わった。販売の一元化により、それぞれが実施していた荷造りや出荷作業を一か所に集約化したことで、参加農家の労働時間の大幅な削減や流通コストの削減、規模拡大に寄与。また、出荷品目が増えたことが強みとなり、個人やレストラン等への新たな販売先の確保に繋がった。なお、生産量はリスクマネジメントの観点から、1カ所1/3未満を適正とし、個人で出荷している。
- 山都町有機農産物のブランド化を図るため、共通デザインシールを導入し、積極的にPR。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
鳥獣被害軽減のため、休耕期間を設けないよう輪作体系を実施。
- **雑草対策**
雑草防止対策は、従来の適期耕耘管理や中耕除草に加え、太陽熱養生処理、畝間マルチを実施。
- **土づくり**
地域の未利用材資源の活用(おから、粃殻、米ぬか、竹チップ等)、畜産堆肥、落ち葉等をブレンドし、成分及びミネラルを配合した自家調製の“バイオ堆肥”や緑肥を施用。土壌分析結果に基づき、施肥設計ソフトを活用し、施肥を実施。

<ICT(情報通信技術)等の活用、情報発信>

- 有機JAS認証ほ場の栽培計画、管理記録は、作業時や計画時にいつでも確認できるようクラウド上で管理。
- 農機具保管庫は、通信型の防犯カメラを設置。
- 消費者とのコミュニケーションをとり、互いの顔が見える販売とするため、インターネット販売の全てに手紙を添えている。
- SNSを活用し、有機農業の日々の作業等を発信し、交流を深めている。
- 新設された道の駅に野菜の他、加工品の開発/定着に取り組んでいる。



【水田抑草ボート】

【お問合せ先】TEL. 080-5375-2480

フェイスブック→



<基本情報>

所在地：熊本県山鹿市鹿本町

<農場概要>

- 有機JAS認証ほ場58a（イチゴ（うち育苗床13a））
- 平成29年（2017年）に有機JAS認証を取得。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 大学卒業後、海外青年協力隊を経てJICAに就職し、支援活動を通して海外における有機農産物への意識の高さを実感。また、子育てのコミュニティを通して、食の安全安心の大切さを強く意識するようになり、40歳で就農を決意。海外生活で生のイチゴを食べる機会が無かった子供達の「イチゴが食べたい。」の一言でイチゴの有機栽培を目指す。

<販売について>

- 大手スーパー系列の有機農産物ショップを中心に、ネット販売や生協等へ販売。なお、有機農産物ショップとは出荷時期を通して同じ単価で契約し、通常の販売と比べて高単価を実現。
- 令和3年（2021）から海外（アジア）へ輸出。
- 無添加ジャムやスパークリングワイン、冷凍イチゴなどの加工品開発により出荷ロスの削減と有機イチゴのPRを実施。



<消費者等への情報発信について>

- ホームページや「農産物直販サイト」を活用して、消費者との情報交換を実施。
- 有機農業を志す研修生を受け入れ、次世代の農業者を積極的に支援。



<病害虫対策・土づくりなど>

- **病害虫対策**
捕殺に加え、防虫ネットや白マルチの反射利用による害虫の侵入抑制対策（物理的防除）、チリカブリダニやコレマンアブラバチなどの天敵導入及びBT剤やフェロモン剤利用（生物的防除）等を組み合わせ病害虫発生を抑制。
- **土づくり**
阿蘇地域に自生するカヤ（野草）を敷き藁としてほ場の畝間に施用。栽培終了後にすき込み、太陽熱養生処理を行い土壌構造を改善。
- 効率的な生産に適した品種への転換。果形が大粒で果皮が硬い品種「恋みのり」に転換したことで、パック詰めへの労力削減と輸送性が向上。



<経営の課題>

- 更なる収量の増加を目指し、栽培技術を向上。
- より簡易的な有機栽培方法の確立・体系化及び雇用者の確保。

<今後の展開>

- まだ認知度の低いイチゴ有機栽培を広め、栽培の裾野を広げていきたい。また、年齢・能力・性別を問わず多くの人々が活躍できる農園を作ること、農業の魅力を広め、地域農業に貢献していきたい。

【お問合せ先】TEL. 050-1303-4066
ホームページ：http://itofarm.org/

<基本情報>

所在地：大分県宇佐市

<農場概要>

- 野菜3.7ha、全て有機 J A S 認証を取得
- 従業員数：8名
- 「口にも体にもおいしい野菜が当たり前の世の中」を目指して年間約30品目の野菜を栽培



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 人が野菜を育てる「人」メインの考え方でなく、「野菜」自体が健康に生育する環境を人が整えるという「野菜(と自然)」を主体に物事を考え、35年前から有機農業に取り組む。
- 平成14年(2002年)に前身である「佐藤農園」として有機 J A S 認証を取得、平成27年(2015年)の法人化に伴い「さとう有機農園株式会社」として再取得。

<販売について>

- 販売する全商品が有機 J A S 認証品。食の安全・安心が求められる時代の流れとともに販売量が増加。
- 有機栽培は特別な栽培でないと認識。生産性を上げることで消費者が当たり前に手にとってもらえる価格設定に努める。
- 関東、関西、名古屋の卸売業者、生協を中心に、百貨店、セレクトショップに販売。最近は業務用・加工用としてレストランなどにも販売。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
自然環境に基づいた栽培環境を整えることで野菜本来の抵抗性を発揮させる農薬を使用しない栽培を実現。農薬(有機 J A S 指定資材)はできるだけ使用せず、太陽熱消毒や人の手による捕殺で対応。
- **雑草対策**
気候に応じた作物を栽培することで出来るだけ除草の手間を省く。草の発芽前に特注の草かきで「土を動かす」ことにより生えにくくする。
- **土づくり**
植物由来のボカシ(大豆、米ぬか等)を中心に土づくり。市内の酒造メーカーの焼酎粕や近隣生産者の廃菌床など、地域資源も活用。落ち葉を使用した踏み込み温床による育苗。

<苦労しているところ・現場の課題>

- 従業員の確保。パートではなく責任ある仕事を任せる正社員を雇用したい。

<今後の対応>

- 近隣で有機農業に取り組む農業者が、お互いに作物を分担し栽培することで安定供給が可能となる。そのような仲間を増やして連携・共存することで有機農業全体の発展につなげたい。



【お問合せ先】TEL.0978-32-0734

会社ホームページ <https://www.satoyuki-nouen.com/>

<基本情報>

所在地：大分県臼杵市野津町

<農場概要>

- 面積：6.3ha（すべて有機）
- 従業員：11名
- 栽培品目：サラダ系野菜を中心に年間約12種



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 平成24年（2012年）に総合健康企業フォレストグループの一員として設立。「食」を介した健康への貢献を目指し、作物が持つ本来の味を引き出し、安全・安心な旬の野菜を消費者に届けるべく有機栽培のみに取り組んでいる。
- 平成26年（2014年）に有機JAS認証を取得。
- 平成29年（2017年）に有機JAS小分け認証を取得。

<販売について>

- 販売先はホテル・旅館・デパート・大手量販店や個人経営のレストラン等。



<病害虫対策・除草対策・土づくり、苦労しているところ>

「安全で安心・高栄養化・新鮮」を最大限意識して作業を行っている。

- 全圃場で有機JAS認証及び有機JAS小分け認証を取得しており、JASで認可されている生物由来の農薬も一切不使用。土づくりには臼杵市の有機用堆肥「夢堆肥」と「活丸くん」を使用し、安全性を保つためにすべて種まきから行い、時間と手間を惜しまずじっくりと育てている。
- 葉物のサラダ野菜を中心に栽培しているため、味・色が濃い、きれいな野菜にこだわっている。栽培においては、適切できめ細かな水管理は欠かさず、栽培前の除草対策も徹底し、野菜に十分な栄養がいきわたるようにしている。
- 鮮度の保持にもこだわっており、収穫した野菜は約10℃に保った保冷車にて出荷場に運び、袋詰めと箱詰め作業を終えると、最適な温度環境を維持するため、出荷場大型保冷庫で保管。こうして穫れたて新鮮野菜をお届けする体制を整えている。

<今後の展開>

- 共同出荷グループ「おおいたの有機」の取り組みで大口径販路拡大と流通体制の確立を目指し、大分県の有機農業の拡大に寄与していきたい。

【お問合せ先】TEL.0974-24-3210

会社ホームページ <https://www.ohana-honpo.com/>

<基本情報>

所在地：大分県豊後大野市（緒方町）

<農場概要>

- 面積：3.5ha(うち有機：3.5ha)
- 従業員：2人
- 栽培品目：水稻、麦・大豆、野菜、かぼす、養豚



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 父が有機農業を営んでいたことからその影響もあり、有機農業等を学べる高校へ進学。卒業後、大学で養豚を学び家業に就き、令和5年養豚を始める。
- 令和7年1月、事業継承。
- 平成19年(2007年)に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 有機食品等を取り扱う小売店や道の駅等での委託販売や宅配に対応。
- 加工品（かぼす果汁、黒米、黒米入りあまざけ等）のインターネット販売。
- オーガニックマーケットなど、直接消費者の方とお話できる場で販売。



手押し除草機

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策

水稻は、みのる式のポット成苗システムにより、稲の能力を最大限引き出す。野菜は、入植当初は全滅することもあったが、徐々に圃場の生態系バランスが良くなり、5年～10年で病虫害のない土壌環境ができてきた。

● 雑草対策

合鴨農法、手押し除草機
あめんぼ号（水田株間除草機）
圃場内の雑草を草マルチとして利用



あめんぼ号

● 土づくり

米ぬか、おから、油かす、落葉や畦草を堆肥化しボカシ肥料として施用。また、豚糞を堆肥として利用することで「循環型農業」の輪がさらに大きく広がる。

<苦労しているところ>

- 自然相手なので、病害虫・除草対策と土づくりは永遠のテーマ。
- 除草対策の合鴨が鳶(トビ)やカラスによる被害を受けている。
- 圃場が分散しているので、農作業や見回り等の手間が掛かる。

<今後の対応>

- 慣行栽培に負けないくらい、安心して食べられる美味しい農産物を栽培する。養豚の規模を拡大し、有機畜産物の認証取得も視野に入れていきたい。



【お問合せ先】

TEL・FAX 0974-42-3501

ホームページ <https://ujamaa-farm.com>

<基本情報>

所在地：大分県宇佐市安心院町

<農場概要>

- 面積：有機JAS認証ほ場14.75ha（ハウス3.45ha、露地11.3ha）
- 従業員：約20名（代表含む社員3名、外国人材8名、パート8名（増減有））
- 栽培品目：ベビーリーフ、パクチー、リーフレタス、その他葉物野菜）



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 東日本大震災の影響により、有機ベビーリーフが不足していたため、ベビーリーフを栽培している茨城県の有機農業法人が技術提供する形で福岡県の有機農産物販売会社との共同で当社を設立。
- 平成26年（2014年）に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 販売先の8割近くは、スーパー等小売店向け（大半は関東へ出荷。一部大分県内へ出荷）。2割程度は、仲卸へ販売（主に福岡県）。
- 令和2年当初は、コロナ禍により一時的に売上が落ち込んだが、その後、コロナ禍の巣ごもり需要により回復し、売上は順調に推移。
- 販売先のニーズに応じて商品構成の見直し（内容量を細分化）等を行ったことが売上増に貢献した。



<地域との交流について>

- 主な販売先のほか、地域の直売所でも販売。
- 市内のワイン祭り等に参加し地域とも交流。

【お問合せ先】TEL. 0978-58-3606

ホームページ：<https://ajimu-organic.com/>

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
ベビーリーフは播種から収穫まで2週間程度（春～秋）と作期が短く、病害虫被害のリスクは少ない。パクチーは、作期が45日～60日程度（春～秋）のためアブラムシ等の虫の被害はある。
- **雑草対策**
ほ場周辺は、全て草刈機で除草。ハウス内は太陽熱処理や手刈りで雑草を除去する。露地の雑草は、耕耘作業及び草刈機等で除草する。
- **土づくり**
赤土（粘土質）のため、成熟した土壌となるには時間がかかる。市内の酒造メーカーから焼酎粕を譲り受け、おからや米ぬか、牛ふん、鶏ふんを混ぜた堆肥（植物性原料主体）を自社で製造し使用。

<苦労しているところ>

- 当初は、土壌が赤土で硬く、礫が多いため、耕耘作業が困難で、大きな石は手で拾いつつ作業を行った。

<今後の展開>

- 約100棟のハウスのうち令和元年竣工のハウスは土壌が成熟しておらず、平成26年に竣工したハウスに比べ収量が劣るため、生産量の安定化が引き続きの目標。
- 当社主体の有機農産物集出荷体制の構築及び施設整備を検討。



<基本情報>

所在地：大分県佐伯市

<農場概要>

- 面積：約1ha（すべて有機）
- 栽培品目：米、露地野菜（にんじん、玉ねぎ等40種類以上）
採卵鶏11羽



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 園主の 豎山 剛 さんは、東京の企業で働いていた30歳過ぎの頃、福岡正信氏等の著作を読み、消費するだけの生活、食べることに疑問を持ち始め、有機農業を志す。
- 有機農業を実践するため、34歳の時、企業を退職して鹿児島県いちき串木野市に移住。JAへ勤める傍ら、米、麦、露地野菜の栽培を開始（約1ha）。自然卵養鶏で150羽を飼養していたが、台風により鶏舎が崩壊。
- 奥様の大分県への転勤に伴い、再移住を決意。大分県内で移住先を探す中、数々の縁が繋がり、平成25年（2013年）に大分県佐伯市に再移住。
- **令和4年（2022年）に有機JAS認証を取得。**

<販売について>

- 米、野菜を佐伯市学校給食に提供。
- 個人販売、マルシェへの出店。
- 生産された有機野菜は、奥様が経営するカフェでも提供。



【お問合せ先】

オーガニックカフェ たら・ぷれた（奥様経営のカフェ）

Instagram : [@terapuleta](https://www.instagram.com/terapuleta)

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
太陽熱養生処理、作付けする場所や時期の分散、連作を避ける。
- **雑草対策**
草が小さいうちに管理機で中耕を行う等、こまめに物理的防除を実施。
- **土づくり**
鶏糞を主体に、稲わら、米ぬか、もみ殻燻炭、竹炭等を自らブレンドした堆肥を使用。

<苦労しているところ>

- 管理機等、機械が小型であり、労力、時間共に多く必要なところ。

<今後の展開>

有機栽培による作物の安全性はもちろんのこと、品質を保ったまま、美味しく、見た目の美しさも追及していきたい。



<基本情報>

所在地：大分県臼杵市野津町

<農場概要>

- 面積: 3 ha (すべて有機)
- 従業員: 5名 (夫婦、雇用3名)
- 栽培品目: なす、はくさい、ケール等露地野菜(約80種類)



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 園主の槌本俊貴氏は、子どもの頃から野菜嫌いであったが、大学在学中(国際関係学部)に、ある有機農家が作った野菜の美味しさに感動し有機農家を志す。就職活動として全国の農家などを訪問する中で、臼杵市の積極的な有機農業推進の取組に感銘。
- 平成28年(2016年)に新卒で臼杵市地域おこし協力隊へ。有機農業研修生第1期生として、同市内の有機農家で3年間の研修。
- 平成31年(2019年)4月に就農(約70a)。
- 令和4年(2022年)3月に有機JAS認証を取得後、長野県内の先進的有機農家でスタッフとして半年間の修行。

<販売について>

- 小売店卸、飲食店卸への出荷が中心。主な販売先は関東・関西や福岡市など。さらに販路開拓中。個人宅配も実施。



【お問合せ先】TEL. 080-1407-7736

ホームページ：<https://tsuchimotofarm.com>

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

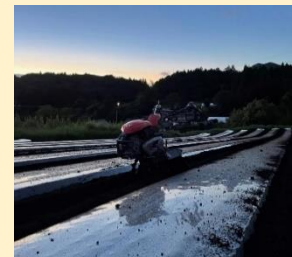
- 土壌分析結果に基づく科学的な土づくりを重視。オーガニックビレッジの臼杵市が運営する土づくりセンターで作られた「うすき夢堆肥」(草木類8割、豚糞2割)のほか、アミノ酸肥料、自家製ぼかし肥料(米ぬか、魚粕、油粕、カニ殻など)や発酵鶏ふんなどを、土壌の状態に応じて効果的に活用。
- BLOF理論に基づく太陽熱養生処理による土壌団粒化の促進と雑草対策。収穫した野菜の状況から土壌の状態を注視・観察。
- 防草シートや中耕による初期除草の徹底、銅やカルシウムなどミネラルの活用による病害虫抵抗力の向上、害虫の発生状況に応じた防虫ネットなど資材の効果的な活用。

<苦労しているところ>

- 多品目栽培は多くの手間を要するが、槌本農園のさらなる強みとなるよう取り組んでいきたい。

<今後の展開>

- 販路開拓に伴う圃場面積・生産量の拡大と、真剣に農業に向き合える人材の雇用を進めたい。
- 生産性の向上。規模拡大を進めながら、機械を有効に活用した効率化を進めたい。



<基本情報>

所在地：大分県豊後高田市



<農場概要>

- 面積：2.2ha（すべて有機JAS取得）
- 従業員：2名
- 栽培品目：野菜4品目



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 代表は北海道出身。20年以上関東地方で勤務していたが、田舎での落ち着いた生活を求め移住を検討。
- 豊後高田市は移住対策や子育て支援に積極的で旅費や家賃の支援もあり、のどかな風景と趣味の温泉も近場にあったことが決め手。
- 無農薬で家庭菜園をしていた経験から、自然と有機農業を選択。
- 世界農業遺産である国東半島の気候を利用した栽培に取り組む。

<販売について>

- 販売の際の差別化や有利販売のために、全ほ場で有機JAS認証を取得。慣行栽培より高めの価格設定で販売できている。
- 就農当初は少量多品目で栽培していたが、栽培計画がうまくできずに出荷が重なり廃棄した経験から、現在は4品目（じゃがいも、にんじん、さつまいも、オクラ）に絞り込んでいる。
- 根菜類は葉物野菜に比べて出荷調整や栽培のスケジュール管理がしやすいので、大ロット・安定供給を目指す方向にシフト。
- 仲卸業者を通してイオンのオーガニックブランド「グリーンアイオーガニック」にも出荷。市内の学校給食にも提供。



<農福連携について>

- 近隣の福祉事業所へにんじんの収穫作業を委託。当初は一緒に作業していたが、現在は作業を分担して任せている。

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- 土づくりには堆肥と緑肥を組み合わせて投入。
- 土壌分析を行い適切な施肥栽培を心掛けている。
- アミノ酸系肥料や海藻ミネラル系資材も肥料として活用することで、大ロット出荷でも食味や栄養価、棚持ちの向上を図っている。
- 管理機での畝間除草やサブソイラーを使った土壌の保水性や養分保持力の改善に取り組んでいる。

<苦労しているところ>

- にんじんの団地化などで面積を広げ、経営規模の拡大を図りたいが、当市は白ねぎ産地のため条件の良いほ場は白ねぎが優先されてしまう。（R8年に森林を開墾して面積を拡大予定。）
- 堆肥を使う生産者が増えたことで、堆肥の取り合いになっている状況。質の良い堆肥の確保が課題。

<今後の展開>

- 有機農業を始めたい地域の新規就農者に、自身の経験やノウハウを共有し、後進の育成に貢献したい。
- 「美味しさ」や「二酸化炭素の排出量削減」など有機栽培のメリットを客観的根拠で示して販売につなげたい。



<基本情報>

所在地：宮崎県綾町（有機農業条令・オーガニック給食推進条令制定の町）

<農場概要>

- 面積：9.5ha（うち有機JAS圃場：3.5ha）
- 栽培品目：レタス・ブロッコリー・キャベツ・ニンジン・かんしょ・ごぼう・水稻 等



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 葉たばこ農家の時代に、農薬・化学肥料を多量に使用する栽培に不安を感じていたとき、綾町の有機農業条令（自然生態系農業）が昭和63年に施行され、行政の支援もあり有機農業に取り組む様になった。
- **平成14年(2002年)に有機JAS認証を取得。**

<販売について>

- 販売先は、イオン、グリーンコープ、夢タウン、ハーティながやま、シーガイア等との契約生産



（紙マルチ田植え機）



（アイガモロボット）



（畑地湛水防除）

<病虫害対策・除草対策・土づくり>

- **病虫害対策**
畑に水を張る「湛水防除」や、自家堆肥（馬糞）の使用により、元肥の使用を少なくする等の工夫をしている。
- **除草対策**
基肥を入れ畝立てした後に透明マルチを張り、太陽熱による対策を実施している。
- **土づくり**
輪作の中に計画的に緑肥を入れることで、体系的な土づくりに取り組んでいる。

<現場の課題>

- 人手不足や資材高騰等で、規模拡大が難しくなっている。
- 地球温暖化の影響により、夏は猛暑、秋・春が無くなったことで、作型や品種の見直しが必要になった。

<今後の展開>

- 人材育成の体制を充実させることで、綾町自然生態系農業を承継する後継者を育てていきたい。

<基本情報>

所在地：宮崎県えびの市

<農場概要>

- 面積：約20ha（うち有機JAS認証取得：約3.5ha）
- 従業員：17人（代表役員含む）
- 栽培品目：主食用米、オクラ、カボチャ、ピーマン、ごぼう、キャベツ、ほうれん草、じゃがいも、ぶどう、イチジク、柿、栗、きんかん等



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 会長の本坊照夫氏が、昭和46年に就農した際、農薬使用が原因と思われる体調不良に陥った経験から、徐々に取組を進め、**昭和58年から本格的に開始。**

<販売について>

- 自宅に隣接する直売所「笑美農(えびの)市場」で、自社生産の米・野菜のほか、味噌、梅干し、あくまき等の加工品も販売。また、**平成30年5月に、6次産業化・地産地消法に基づく総合化事業計画の認定を受け、玄米コーヒーを開発・販売。**
- 道の駅えびの、宮崎県内のスーパー等に、真空パックした米（商品名「笑顔米」）、生鮮野菜、加工品を納品するとともに、「笑顔米」等をインターネットを通じ直接販売。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
土づくりをしっかり行うことが一番大切。土がよくなると植物体が強くなるため、大きな被害が発生することはない。
- **雑草対策**
雑草がまだ小さいうちに、手押し型管理機や乗用管理機による早めの畝間中耕を行っている。
- **土づくり**
牛糞に、籾殻、海藻、木炭、カニ殻、竹パウダーなどを混合し、2か月間発酵させた中熟(中心温度40℃程度)堆肥を圃場に撒き、1か月程度土になじませる。

<苦労しているところ>

- 自社農産物の販売先の確保のほか、除草作業(全作業時間の約半分を占める)、長年試行錯誤を重ねてきた土づくり。
- 有機栽培を志す農業者の育成方法を確立していくこと。

<今後の対応>

- 畜産農家と連携してえびの市一体となり有機農業を推進していくことや、県内の業者と連携して有機農産物を原料とした加工品（地ビール、甘酒等）の開発・販売。



【お問合せ先】TEL. 0984-33-1610

ホームページ：<https://ebinoitiba.com/>

<基本情報>

所在地：宮崎県児湯郡新富町

<農場概要>

- 面積：18ha（うち有機JAS認証取得6.5ha）
- 従業員：14名（代表役員含め5名、パート9名）
- 栽培品目：米、にんじん



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 18歳の時、両親の後を継いで営農開始し、30年ほどは慣行栽培で米及びかんしょ等を生産。このままの営農を継続するか、持続可能な農業を目指していくか悩んだ末、有機栽培を行うこととし、平成20年（2008年）に有機JAS認証取得。

<販売について>

- 有機JAS認定ほ場で生産した農産物は、関東、関西を中心に、九州・県内へも出荷。
- 令和3年8月に有機米を台湾へ輸出したところ、即完売。令和4年以降、台湾やシンガポールでの新富町物産展や食のイベントに参加。

有機米の商品名「宮本」は代表者宮本氏から命名→



<飲食事業について>

- 有機農産物は全て関東・関西へ出荷していたため、「どこで買えるのか」と地元の要望があったことから、令和3年に「有機米農家おにぎり宮本」を開店。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
米のいもち病とカメ虫防除には、有機JASで使用が認められた天然鉱石を使用。
- **雑草対策**
代かきを3回行い、その後、深水管理することで雑草を抑制。冬作を行っていないほ場は、複数回耕耘し、次年度の雑草抑制。
- **土づくり**
有機ほ場は全て水田。野菜と米の輪作（2年3作）体系で、稲わらをすき込むことにより、ほ場に有機物還元。たい肥は自作でなく、有機JASで使用が認められた豚ふんを施用。

<苦労したところ>

- 有機栽培を始めた頃は、指導者もおらず栽培技術も未熟で、収量・品質が安定せず収入が少なく、営農継続困難となった。農業をやめようと考えていた頃、金融機関から融資を受けることが出来、営農を継続するうちに技術確立し、収入が安定し、現在に至る。



【お問合せ先】TEL. 090-3609-6496

ホームページ：<https://www.organicfarmzero.com/>

<基本情報>

本部所在地：鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町

<農場概要>

- 構成員：162戸（有機JAS取得102戸）、職員45名、パート30名
- 面積：275ha
- 栽培品目：約120品目（有機野菜、果樹、茶など）



<有機農業に取り組むきっかけ>

大和田前代表ご夫妻が大学在学中に公害問題に関心を持ったことをきっかけに有機農業の道に進み、昭和55年（1980年）鹿児島市で就農し有機生産を開始。昭和59年（1984年）に有機生産組合「かごしま有機生産組合」を10戸で設立。

<販売について>

- 直営店「地球畑」が県内に3店舗と有機野菜の食べ方の提案も兼ねた地球畑カフェ「草原をわたる船」。



- 全体の3割は直営店舗で、その他の主な出荷先は「オイシックス・ラ・大地株式会社」、(株)ビオ・マーケットを通じた宅配やスーパーマーケットへの卸、コープ九州、その他の生協等。
- 毎年3~4回首都圏のマッチングフェアに参加。
- 平成30年（2018年）4月に海外事業部で輸出事業をスタート。
- 4~5年前から人参ジュース・りんご人参ジュースやごぼう茶・黒糖生姜湯を開発、ベビーフードの開発では、平成30年（2018年）に鹿児島県特産品協会理事長賞を受賞。

<特色ある活動>

- 新規就農者のための研修施設「有機農業支援センター」があり有機苗の供給も行う。

- オーガニックフェスタ（毎年5万人の来場者）を開催・出展。
- 平成29年（2017年）からネパールへの技術支援も開始。

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

生産体制強化のために品目部会及び地域毎の支部会、年2回の作付会議やフォーラム（講習会・分科会）を行ない、経営力向上と栽培技術の共有等を行う。

- **病害虫対策**
土着天敵の活用や適期の播種、コンパニオンプランツの活用。
- **雑草対策**
太陽熱処理の活用、緑肥の活用。
- **土づくり**
土壌分析に基づき、土壌の肥沃度を高めることを優先課題とし、近年は特に緑肥の利用に取り組む。

<苦労しているところ>

- 物流コストと資材コストの高騰。



<今後の展開>

- 有機農産物への国内ニーズと海外ニーズの高まりに対応した生産体制の構築と面積の拡大。

【お問合せ先】TEL. 099-282-6867
生産組合ホームページ <http://kofa.jp/>



<基本情報>

所在地：鹿児島県鹿児島市

<農場概要>

- 有機野菜等（にんじん、さつまいも、えだまめ、ばれいしょ等）10ha
- 有機JAS認定ほ場で農産物を生産
- 有機農産物にこだわった農園直営店舗を展開



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 昭和53年（1978年）に父の病気をきっかけに有機農業を始め、平成17年（2005年）に子供達（兄弟姉妹）が経営を引き継ぎ、平成25年（2013年）から直営レストラン「森のかぞく」を鹿児島市内で展開。（現在閉店）



<販売について>

- 販売は県外の卸会社数社向けを中心に、県内では直営店のほか、コープ生協、スーパーハルタ、地球畑、物産館等へ出荷。
- 平成25年（2013年）に自社農園野菜と有機農産物にこだわった直営レストラン「農園食堂森のかぞく」をオープン。
- 平成26年（2014年）に法人化し、有機農産物や加工品の販売先を拡大。令和元年（2019年）に森のかぞく Airakitchenを始良市にオープン。コロナ禍でレストランから有機野菜を使った弁当惣菜の製造販売へとシフトし、現在13店舗に卸販売を行う。
- 自社の人参を使用した「食べる人参ジュース」を委託製造し、直売所や県内のこだわりを持った店舗で販売。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策

太陽熱利用土壌消毒を実施。草堆肥等を利用した土づくりにより、健全な野菜等が育つ環境を整える。

● 雑草対策

太陽熱利用土壌消毒を夏場実施。この処理を行えない時期はマルチを使用。手作りの除草機で、雑草が小さいうちに除草。

● 土づくり

畑を痩せさせないため年一作とし、他の期間は緑肥を栽培しほ場に還元。主に落ち葉や刈り草を原料にした草堆肥を使用し、毎年、土壌分析により不足する成分（ミネラル等）の資材も投入。



<苦労しているところ>

- 栽培技術が確立出来ていないこと。

<今後の展開>

- 弁当惣菜の安定製造と販売を引き続き目指すとともに、生産性向上のために機械化と効率化に取り組む。
- 草堆肥の安定生産を目指し、湧水農場に堆肥舎を建設予定。また有機農業技術を確立させ、収穫量の安定と品質向上を目指す。

【お問合せ先】 TEL :099-802-6100

農園ホームページ : <https://morikazo.com>

<基本情報>

所在地：鹿児島県日置市東市来町

<農場概要>

- 6haの農場でにんじん、だいこん、さつまいも（紫いも）、水稻（古代米、ヒノヒカリ）、キウイフルーツを生産。
- 有機JAS認定を取得。



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 農薬等の影響で体調不良となる農家が、少なくないことを聞いたことがきっかけ。有限会社かごしま有機生産組合で有機農業の研修を受け、有機農業に従事。
- 平成29年（2017年）に有機JAS認証を取得。

<販売について>

- 9割は、有限会社かごしま有機生産組合に出荷し、地域の物産館（日置市こけけ特産品販売所）にも出荷。その他、ふるさと納税返礼品、SNS等を通じて直接販売。
- キウイフルーツは、地球畑（鹿児島市）に今年から販売。
- だいこん、にんじんは、東市来小・中学校の給食用にも納品。



<作物の多角化について>

- だいこん等の収穫作業は、重労働なので、年齢を重ねても有機農業に取り組めるように、キウイフルーツ、カンキツ類の栽培にも取り組む。キウイフルーツは、今年から出荷。
- 夏場の収入を確保するために、切り餅の製造・販売を検討中。

【お問合せ先】TEL. 080-3960-3622

ジャラン農園 Jarun Farm | Facebook



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

● 病害虫対策

農薬は、一切使わず、土づくりをしっかりと行うことで病害虫の発生は減少。
また、キウイフルーツ、カンキツは、カミキリムシの食害（木くず）を発見するため、栽培木の株元の除草を徹底。

● 雑草対策

畝間も含めてマルチ被覆している。特にマルチ穴の株元の除草に苦労するので、雑草が小さいうちに手取りを徹底。
冬にんじんは、夏に透明マルチ被覆による太陽熱土壤消毒で雑草を抑制。水稻は、ジャンボタニシが除草。

● 土づくり

野菜・いもは、栽培前に緑肥を作付け・すき込みを実施。
また、畑の状態を観察して、鶏糞を必要な量、散布。

<苦労しているところ>

- さつまいもの害虫（コガネムシの幼虫）による食害。
- 気候変動による植付け時期の見極め。

<今後の展開>

- 機械が使えない狭い水田で、今年から冬期湛水、直播等の自然栽培農法の実証に取り組む予定。これにより、手間・コストを掛けずにコメの生産を行うとともに、地域の農地を守る。

<基本情報>

所在地：鹿児島県屋久島町

<農場概要>

- 有機 J A S 認証圃場面積：12ha（1枚の圃場面積10a程度）
- ばれいしょ4ha、ウコン1ha、かんしょ50a
- ウコンは、粉末に加工し販売（有機加工 J A S 認証を取得）

集落の象徴ともいえる美しい山「モッチョム岳」。

農園の名前にも、お借りしています。



<有機農業に取組むきっかけ>

- 慣行栽培のばれいしょの価格が半値に下がった時期に、知人が栽培する有機栽培のばれいしょの価格は、下がらず取引されていた。このことから、経営の安定を図るため有機農業を始めようと決意。
- **平成15年（2003年）に有機 J A S 認証を取得。**

<販売について>

- 販売する全商品が有機 J A S 認証品。うち、約5割をかごしま有機生産組合へ出荷。
- 付加価値を付け収益向上を図るため、ウコンの粉末加工場を平成29年（2017年）に整備し、**平成30年（2018年）に有機加工食品 J A S 認証を取得。**
- ウコンの粉末加工は、主に卸業者に販売。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
ばれいしょは、疫病対策として、石灰ボルドーを使用。
かんしょは、10倍希釈の食酢を使用。
- **雑草対策**
ばれいしょは、2回の培土（土寄せ）で効果あり。
かんしょは、畦間を1mに設定し通行可能な小型トラクターによる除草を行うことで、労力軽減及び作業時間の短縮を実現。
- **土づくり**
全品目で鶏糞を主に使用するほか、雑草をすきこみ緑肥として活用。圃場は3年に1回の輪作（ばれいしょの後に、かんしょとウコンの作付）とし、12haのうち3分の1程度の圃場は、可能な限り2年間休ませる方法をとっている。その間、雑草を繁茂させ緑肥等にするなど、自然の力を活かした地力回復を実施。

<苦労しているところ>

- 圃場1枚の面積が10a程度と小さく、作業効率が非常に悪い。

<今後の展開>

- 新しい品目として、モリンガ（薬用作物の一種）の栽培を始めたので、付加価値を付けた販売に繋げる。
- 長命草（薬用作物の一種）の栽培予定。



<基本情報>

所在地：鹿児島県大島郡喜界町湾41-1

<農場概要>

- 面積：3.8ha（うち有機JAS認証ほ場：2.1ha）※非認証ほ場も有機栽培と同様の生産方法
- 従業員：3人
- 栽培品目：有機さとうきび（純黒糖）、有機白ごま（白いりごま）



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 口にするものとして「安全・安心」なものを製造し、消費者へつなげたいという思いで有機さとうきびの生産を開始。
- 喜界島はサンゴ礁隆起の島であり、降った雨はすぐに地下へと浸みこみ、地下水となって海へ流れ出す。化学肥料や農薬を使用すると、海洋汚染に繋がることや地力の低下につながるなどが問題であると考え、持続可能な農業として、環境にやさしい有機農業に生産当初から取り組む。

<販売について>

- 酒販売店に黒糖焼酎と、有機黒糖・有機白ごまを一緒に食してもらうことを提案。
- JR九州の食堂列車や都内のフレンチレストランへ販売。
- お菓子の材料として、都内や関東の菓子店へ直接取引。

<こだわりについて>

- さとうきびの刈り取りは、切り口から劣化が進むため、なるべく切り口を小さくするなど全て手作業で実施。
- きびの先端部分は苦み部分を切り落とし、根元から甘みの強い部分だけを黒糖の原料とすることで、安全・安心でおいしい有機黒糖を製造。



<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病害虫対策**
ワタアブラムシやバッタの防除対策として、忌避剤となる木酢液を散布。周辺の農家にも理解を得ながら、地域一帯で適切な防除を実施。
- **雑草対策**
できるだけ雑草が成長する前に、手作業のほか刈払機や、自走式モアで除草。
- **土づくり**
自社で黒糖焼酎を製造する際に発生する、焼酎かす、米汁のほか黒糖製造の際に発生するバガス（きびの搾りかす）を肥料として圃場に還元。

<苦労しているところ>

- 当初は、害虫や雑草対策について周辺から苦情等もあったが、現在は、普段からコミュニケーションをとることで良好な関係を構築。
- 雑草の駆除。特につる性の雑草がキビに巻き付き、収穫等の作業負担が大きい。

<今後の展開>

- 有機さとうきび等を生産する仲間を増やし、持続的な農業を進め、喜界島の豊かな環境を守る。



【お問合せ先】TEL. 0997-65-1531

ホームページ：<https://www.kokuto-asahi.co.jp>

<基本情報>

所在地：鹿児島県出水市下鯖町

<農場概要>

- 面積：有機栽培水稻14ha
(うち有機JAS認証：約7ha)
- 栽培品目：米、麦、大豆、玉ねぎ



<有機農業に取り組むきっかけ>

- 昭和58年（1983年）、農薬を多用する農業に疑問を感じ、農薬を減らしたいとの思いから、同じく有機農法を目指す仲間たちと一緒に有機農法を学び、その延長で**アイガモ農法**も開始。

<販売について>

- 当園で収穫した米は、商品名「合鴨米」「さわださんちのお米です」として、それぞれ、白米、玄米、分付米として販売。
- 平成29年（2017年）に有機JAS認証工場（はる菜）を整備し、あくまき、餅、山菜おこわ、米粉パンなどの加工食品の製造販売を開始。
- 有機あくまきは、鹿児島の竹の皮を天日に干して使用。木灰のあく独特の風味が特徴。有機JASマーク付きの自家製有機きな粉をまぶして販売。

有機あくまき
(有機きなこ添え)



有機JAS認証芋焼酎
(Hi-Five)



<新たな販売先として>

- 令和7年産の有機栽培米は、阿久根市の大石酒造において、有機JAS認証芋焼酎の原料として使用。

【お問合せ先】TEL.0996-67-0911

会社ホームページ：<https://sawadanouen.com/>

<病害虫対策・除草対策・土づくり>

- **病虫害対策、雑草対策（アイガモ農法）**
当園では、アイガモ農法で、無農薬栽培を実施。アイガモ農法とは、水田にアイガモを放すことで、害虫や雑草を食べてもらい、農薬や除草剤がなくても稲を育てられる農法。アイガモは、ふ化0日のヒナから育て、14日齢で水田に放ち、60日齢ごろまで活躍。
- **土づくり**
当園では、稲わらと冬草をすき込み、肥料は菜種油粕とグアノを使用。有機肥料によって、土壤微生物の活性化により、土の団粒構造が形成され、「ふかふかの土」「肥料持ちの良い土」へ変化し、農作物が生長。

【アイガモ農法】



<苦労しているところ>

- 雑草対策。
- 夏場の暑さ対策。
- 夏場の高温等による減収。

<今後の展開>

- 有機農業を継続し、安定的に有機栽培米を消費者に提供。
- 仲間を増やして連携し、有機農業の更なる普及を目指す。